

「地球に貢献する技術開発」

Developing Technology That Contributes to the Earth



執行役員
(開発本部本部長)
苗代 光博
Mitsuhiro Nawashiro

世界を混乱に陥れたコロナウィルスの脅威から3年が経ち、世界はコロナウィルスとの共存の道を模索し、元の活気ある生活を取り戻しつつあります。コロナ禍の生活で、私たちは当たり前だと思っていた移動の楽しみや人とのつながりの大切さなどを再認識することができました。特に影響を受けたものが働き方であると感じています。自宅で仕事をすることが日常になり、会社に出社せずに会議にでたり、海外拠点の現場確認も映像の発信により実施できたりするようになりました。過去から引き継がれる大切なことをこれからの生活に残しつつ、IT技術の進展などを恐れずに取り入れ、その上で、大切なものを考える時間ができたと思います。

しかしながら、まだまだ光明がみえない課題が環境対策ではないかと考えています。私の幼いころは、光化学スモッグ注意報が発出されると、外で遊んでいても、校舎に急いで帰るという経験を何度かしましたが、数年後、日本では「めったにないこと」と変わってきました。一方で世界の他の国々では、寒い時期になると10m先が見通せずにその中を車が行き交う光景があります。経済の成長とともに、環境の問題は大きく影響しあっていると考えます。

今までは、人類の利便性を優先した技術開発が進められてきました。その結果、私たちの生活は豊かになりましたが、地球規模では環境悪化が進み、水害などの異常気象が発生することになったと受け止めなければいけません。将来、地球規模で、持続可能な社会をつくるため、脱炭素に向けた技術開発を進めて行くのが企業の使命と受け止めています。

最近の動向として、自動車を取り巻く環境はますます厳しくなっています。CO₂低減の規制が強化され、各自動車メーカーは電動化車両のグローバル生産目標を掲げ、開発を促進しています。中国では電動車の普及のため、国をあげてインフラを充実させています。電動化に向けた商品開発は、部品メーカーにとって成長するための大きな原動力となる一方で、乗り遅れると取り返しのつかない転換点になり得ると危機感を募らせています。

昨年の豊田合成技報では「カーボンニュートラル実現に向けた技術開発の取り組み」をテーマに特集を組みました。豊田合成のCNに関わる技術開発と生産技術のご紹介をさせていただきました。今回の豊田合成技報では、電動化にむけた開発の方向性を示す内容に進化させ、ご紹介したいと考えて「電動化の進展に対応した技術開発の取り組み」といたしました。

なお、今回の特別寄稿では、名古屋大学未来材料システム研究所 教授 山本真義先生に執筆をお願いしました。山本先生は自動車の電動化動向をテーマに、各社の車両の分解調査から技術開発の進展について研究されています。その中から豊田合成の進むべき方向や技術の可能性について、ご提案いただいております。ご一読いただき、豊田合成の技術開発について、読者の皆さまから、より一層ご理解をいただければと考えております。